Story.1 Kazuhiro Hodoshima

ここなら想う農業がやれる

程島　和浩（37）さん
和恵（35）さん
暉雄（5）くん

なんのゆかりもない三豊市へ

程島さん一家が埼玉県から三豊市に移住してきたのは1年前。福島第一原発事故がきっかけでした。野菜を育てる者として、これまで信頼して野菜を買ってくれている人に安心な商品を届けられるのか不安に駆られていました。そんなとき友達がいる四国に遊びにくることに。高知、松山、直島、はじめての四国を満喫しました。三豊市に来た時に、「ここなら想う農業がやれる」そう、感じました。

そして、2011年11月。なんのゆかりもない三豊市に移住してきました。

三豊に何かを求めて、何かを感じて、定住する皆さん。今回は、新たに「みとよぐらし」をスタートさせた皆さんの「みとよじかん」にスポットを当てます。話を聞くことで、私たちが当たり前になり、気付かなかった三豊の魅力を再発見できるかもしれません。市では、24年4月から田園都市推進課を設置し、定住支援に力を入れています。みとよぐらしをバックアップする施策や、その制度を活用した人たちの声を紹介します。

地域の人に支えられ

程島さんが野菜作りを再開するにあたり、市の農業委員会に相談すると、使っていないビニールハウスをもつ小田明義さん（79）を紹介してくれました。「市の対応には感謝しています。都会では、なかなか的を得た回答がもらえないことが多いですが、親身になってくれました。地元の人も、地域に密着した対応をしてもらえました」

小田さんは、使っていない豊中町の空き家も貸してくれました。地元の人も、耕作のアドバイスをしてくれたり、農機具を貸してくれたりと、日常生活でも協力してくれ、必要なところをバックアップしてくれています。

▲小田さんは程島さんにとって頼れる存在

野菜への思いお客様への誠意

「あぐりか農園」を開設し、無農薬・無化学肥料栽培で季節の野菜を作っている程島さん。それぞれの旬の野菜を7～8品詰めた「旬の野菜セット」をお客さまに届けています。「この料理を作るためにこの野菜を買うというのではなく、この野菜があるからこのメニューにしよう、と野菜を楽しむ生活を送っていただけたら嬉しいです」と妻の和恵さん。おつきあいをする中でお客さまの好みを感じたり、野菜の調理法などの情報交換をするなど、信頼関係を大切にしています。

田舎でもなく都会でもないちょうどよいバランス

「田舎と思っていましたが、住んでみるとなんの不便もありません。スーパーも近くにあり、大きな渋滞もなく、いろんな意味で街のサイズがちょうどいいんです」と和浩さん。「人の多さも、平野の面積も、情報の多さもちょうどよい。田舎でもなく都会でもない、とてもバランスのとれたところ。自分らしく生きられます。余分なことをそぎおとすことができ、映画をみても大好きな音楽をしても、都会でいた時とは感じることが違います」気持ちに余裕ができたようで、和浩さんは幼少の頃にしていた絵を描き始めました。

「この1年はまだまだ様子見。これからは農業を軌道に乗せつつ、気持ちとしては農業と同じ割合で大切に思っている音楽活動も続けていきたいです」月1～2回はライブをしている程島さん夫妻。仕事もプライベートも三豊に来て自分たちらしく、いきいきと充実した「みとよじかん」を送っています。

Story.2 Tadashi Fujita
全国の若者の農業研修機関をつくりたい

藤田　正さん(70)

藤田さんは商社勤めの後、神奈川県から徳島県上勝町へ来て有機農業の農業塾を開いていました。そして24年4月に上勝町の紹介で、塾生3人と財田町へ農業の拠点を移しました。一人は体調を崩しリタイアしましたが、2人の塾生と野菜作りに励んでいます。

財田町では、山ならではの魅力を生かした作物を栽培しています。手始めに三豊なすに力を入れ、他にもにんにくやブロッコリーなどを手がけました。

稼げる農業の仕組みづくりにも取り組んでいます。「ゆくゆくは、農業をしたいという全国の若者のための研修機関を三豊市につくるのが夢。そして、市の遊休農地を使って農業をし『みとよぐらし』をしてもらえたら」と、意気込みを語ってくれました。

Story.3 Hiromo Morita
海のあるところで暮らしたい

森田洋美さん(32)

▲猫の表札も島の人からの手作りプレゼント

「絵を描いて、海がある田舎に住んで、野菜を自分でつくる―そんな憧れていた生活に今近づいています。これぞプライスレスです」

森田さんは、2011年の秋に粟島芸術家村に芸術作家として参加し、4カ月の滞在のあと、居心地の良さに将輝さん（夫）と粟島に移り住みました。

海のあるところで住みたいと思っていた森田さん。今、玄関をあけると、海が広がる家に住み、目の前の海で、魚を釣ったり庭で作った季節の野菜を採って生活しています。島全体の「ほのぼの」感がなんとも魅力的だそうです。

人の温かさに惚れて

粟島で家をみつけるにあたり、「本気ならすぐ探してやる」と、島の人が空き家を探してくれ、掃除まで手伝ってくれました。「皆さん、とても親切。道を歩いていたら、『野菜をもっていけ』と言ってくれます」尊敬するのも、島の人。「島の人でかっこいい人がいます。なんでも自分でするんです。釣りでもエサなんて買ったら叱られます。『買うバカがどこにいるか。獲るんだよ』って」。人の温かさ、人との距離間もこの島がすきな理由のひとつ。「絵を描くにも気持ちがのびのびとします。自分では気づかなかったけれど『色合いが変わった』とか『描いている猫の表情が変わった』といわれるようになりました」来年は粟島で瀬戸内芸術祭も開催されます。「芸術家の皆さんが島での生活を生かした作品を作っていて、出来上がりが楽しみでたまりません」

Story.4 Hideki Mino
仁尾を活性化させる！

仁尾サンリゾート店長　三野　秀樹(34)さん

観音寺在住の三野さんは、大学卒業後、転職を経て、今年７月から「サンリゾート仁尾」の店長に。三豊の食材を使った創作料理やサンセットバーベキューのほか、シーカヤックツアーなど三豊の魅力ある資源を活かした事業を展開。そんな三野さんに三豊市への思いを聞きました。

▲時間を忘れるほど、解放感溢れる空間が広がります

三豊市を選んだわけ

三豊市はおだやかな瀬戸内海、「日本の夕陽100選」に選ばれる夕日など、自然が作り出す「美しさ」がたくさんあります。そんな自然溢れる「たゆたう時間」がみとよの魅力。お客様は団塊の世代の人が多く、わざわざ遠くからも来てくれます。予想していなかったので嬉しいですが、きっと皆さんも自然に包まれゆったりとした時間を求めているのだと思います。

私も、仁尾は小さい頃海でよく遊んでいて、思い入れのある場所で、地元を離れてからも、いつ行ってもいい意味で、変わらない風景がある癒しの場所だと感じます。

地域の活性化

今アレックス・カーさん（古民家の保存や町屋再生に注力している東洋文化研究家）が仁尾の昔ながらの町屋を再生しようとしています。これが起爆剤となって、仁尾が活性化すればとわくわくします。人を呼ぶ観光には食、遊び、宿泊が必要と言われています。得意分野の「食」を活かして、人のため、地域のため、活性化に関わっていけたら嬉しいですし、その瞬間に立ち会えればとても幸せです。

また一人ではなく、皆でやれば人は必ず集まると思います。これからも地元のミュージシャンや地元ならではの食べ物を扱う店舗などいろいろな人とコラボして面白いことをやりたいですね。人対人のあたたかみのある、地域に根差したビジネスで、今やっていることが形になり、街がにぎわって、また新たな地域産業を興していけるのが理想です。

今ある魅力に気付いてほしい

せっかくの地域資源。市民の皆さんにももう一度三豊にある資源、住んでいる人が当たり前になっているもののよさを改めて再発見してほしいと思います。

私自身もこんな夕日のきれいな海のある三豊市で暮らしたいと思っていて、市の空き家バンクのウェブサイトで、情報をチェックしています。

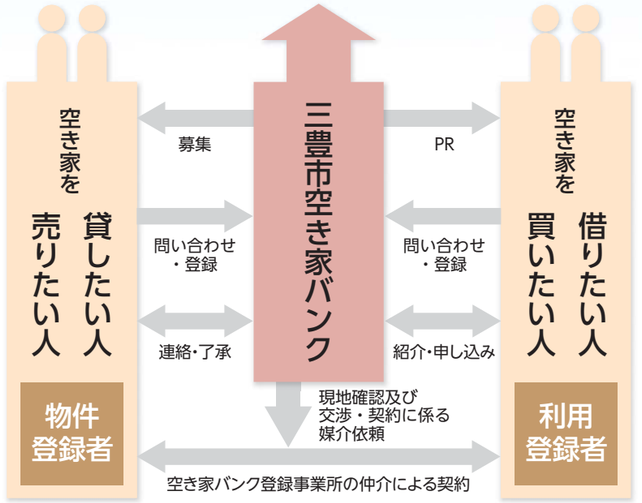
みとよぐらしを 応援しています！

暮らすとなると、まず気になるのは「住むところ」。市では、空き家を借りたり、家を購入、新築する人のサポートを行っています。市内で住んでいる人も使える制度です。あなたにぴったりな住み方を見つけてください。新たに農業を始めるための支援もあります。

空き家バンク ＆ 空き家バンク物件のリフォーム補助金

空き家バンク制度では、空き家の情報発信を行い、三豊市への移住・定住を応援しています。また、一定の要件を満たせば、市空き家バンクの登録物件に入居する際のリフォーム費用の補助を受けることができます。

空き家バンクでは空き家の募集を行っています。大切な家をだれかに使って欲しい人は、ご連絡ください。



第2の人生を三豊で楽しく！

仁尾町在住
鹿子善生さん(62)

空き家バンク利用しました！

兵庫県で暮らしていましたが、定年後の新たな仕事で仁尾町に来ました。不動産屋に行き、空き家バンクの制度を知り、活用しました。決め手は、職場に近かったことと、静かで海や自然に恵まれていていいなと感じたからです。住み始めてまだ間もないですが、よく寝られます（笑）。三豊の人は皆さん親切で、道を尋ねても快く教えてくれて嬉しいです。1月にオープンする高齢者向け住宅「フクシア」の館長として、第2の人生を入居者の皆さんと一緒に楽しく元気に過ごし、笑いの絶えない住宅にしていきたいと思います。

自然の移り変わりに心奪われる

財田町在住
橋場 栄さん(44)
幸恵さん(37)

空き家バンク利用しました！

茨城で住んでいましたが、心癒される風景に憧れて、移住してきました。三豊市の空き家バンクは東京の移住フェアで知りました。市が紹介しているということで、信頼できましたし、相談もしやすくてよかったです。地元の人に「こっちは、ほんまなんもないやろ」とよく言われます。住んでいる人は気付いていないかもしれませんが、ほんといいところですよ！夕日を見ても、季節に変わりゆく自然を見ても、毎日がドラマチックです！星が夜空いっぱいにちりばめられているのを見たときは、息を呑みました。落ち着いたら家で家庭菜園をしてみたいですね。

三豊市内に空き家をお持ちの方へ

現在、空き家バンクに登録する物件を募集しています。
まずは電話かメールでお気軽にお問い合わせください。

40歳未満若者の新規住宅取得への補助金

40歳未満の若者が新規住宅を取得した場合に一定の要件を満たせば、補助金が交付されます。対象となる取得時期は平成23年4月1日から26年3月31日までで、補助額は次のとおりです。

●取得にかかった費用が1500万円以上の場合は、100万円の補助
●取得にかかった費用が1500万円未満の場合は、取得価格に20分の1を乗じて得た額

※その他の詳しい要件は、必ずお問い合わせください。

新規就農者への応援補助金＆就農相談

新規就農者（要件あり）が営農計画を提出し、認められた時は、農業技術や経営を習得するために必要な経営やその計画を達成するために必要な経費などを補助する制度があります。その他にも、毎月、新規就農者を対象に「市担い手育成総合支援協議会」（日程は31ページ参照）が「就農相談」を行っています。

夕日の美しさは格別

仁尾町在住
坂本 幸司さん(42)
奈緒子さん(38)
ほのかちゃん(0)

補助金利用しました！

建築事務所の人に教えていただき、補助金制度を知りました。補助金をもらうには色々な書類を出さなければいけないだろうと覚悟していましたが、手続きがスムーズでびっくりしました。夫婦ともに海が大好きで、結婚当初から海の近くに家を建てようと決めていました。何十箇所もの海のロケーションをみて、眺めのよさで仁尾町のこの場所に決めました。夕日の美しさは格別です。この場所を探すにあたり、地元の人が協力してくれ、自分のことのように熱心に探してくれました。そんな、おだやかで明るい人の優しさに惹かれたことも、この地を選んだ理由の一つです。代々住んでいる人が多いだろうから、コミュニティになじめるか心配だったんですが、地域のイベントに参加してみて、そんな悩みもふっとびました。みなさん、懐が深く、温かかったので、安心して飛び込んでいけました（笑）。三豊市はこんなに景色がきれいで自然が豊かなのに田舎すぎない。バランスがいいところだと思います。娘は三豊市がふるさとになります。娘と一緒に家族で季節を感じたり、風の音を聞き、海を見ながら、朝食を食べられたら幸せです。

▲家のバルコニーからは、仁尾の海が一望できます

今回お知らせした以外にも、みとよぐらしを詳しく紹介している移住・定住ポータルサイト「みとよ暮らし手帳」。ぜひ遊びにきてください。

市のホームページにバナーがあります

三豊市への移住・定住ポータルサイト。
みとよ 暮らし手帳

価値観が多様化する中、仕事もプライベートも自分らしさを大切に、ていねいな暮らしができる心豊かな「みとよじかん」はまさに「みとよブランド」。
みとよぐらしに興味をお持ちの人、お気軽にご相談ください。

▼問い合わせ
田園都市推進課
☎73・3011
農業振興課
☎73・3040